第8章　契丹文字解読の可能性

——村山七郎氏の論文を読みて——

まえがき

契丹文字の解読は，1889年ロシアのヤドリンツェフ Nikolai Jadrincev 氏によって，オルコン河畔コショツァイダム Košo-Caidam において発見された闕特勤 Kül-tägin 碑の解読 —— それは1893年デンマークの言語学者トムゼン Vilhelm Thomsen（1842－1927）氏によってなされたが —— と共にアルタイ学にとって重要な意義を有する。アルタイ諸語を，また満蒙史を研究する人々によって，それは色々な立場から望まれ，かつ試みられたが[1]，村山七郎氏の「契丹字解読の方法」(「言語研究」17，8号，1951年3月）が発表されるまでは，注目に価する研究は発表されなかった[2]。筆者もアルタイ諸語比較言語学の要請に基づき，契丹語をアルタイ諸語の数少ない歴史資料の一つとして，女真語と共に研究の対象として来たので，ここに村山氏の論文に対する疑問を述べると共に私自身の方法の一端をも記さんとするものであるが，これによって契丹文字解読を含むアルタイ学へ多少とも寄与することができれば望外の喜びとするところである[3]。

第1節　文献に記されたいわゆる契丹文字

契丹語研究は遼陵の哀冊文が発見されるまでは，ただ王易の『燕北録』所載の五字が知られているのみで，『遼史』，葉隆禮の『契丹国志』(1180年)，『燕北録』，武珪の『燕北雑記』[4]等に漢字によって不完全に表記された契丹

語を資料として論ずるより他方法がなく[5]，天会12年（1134年）陝西省乾州北関外唐高宗乾陵無字碑に勒された「大金皇弟都統経略郎君行記」[6]旧李王家蔵のいわゆる女真文字鏡[7]と契丹文字の関係も不明であったが[8]，1922年6月21日，熱河省林東県の西，白塔子 čaγan suburγa 西方慶陵中陵[9]で L. Kervyn 氏が手写した二基の契丹文字哀冊が発表されるに及んで[10]，契丹文字研究の端緒が開かれるに至った。

第2節　契丹語の帰属

契丹民族の言語がトルコ・モンゴル・トゥングース，朝鮮・日本の三語派二語よりなるアルタイ語族に属することは，洪邁（1123－1202）の『夷堅志』丙集18巻「契丹誦詩」の項[11]を見れば明白である。しからばアルタイ語族帰属の諸語派のうちいずれに属するであろうか。朝鮮語，日本語の一方言である可能性は全然問題となり得ず，トルコ語派に属する可能性も歴史的地理的諸条件からして最も少なく，夙に白鳥博士は唐書の「太宗曰契丹突厥不同類」，遼史の「回鶻使至，無能通其語者」を引いてトルコ種ではないと断定しておられる[12]。次いで博士は「契丹既に Turk 種にあらずとせば Tunguse 種或ひは蒙古種なるべく，然らざれば此二種の混合ならざるべからず」と書いておられるが，これは，しばしば誤解される如き，二民族言語の混合 —— それは科学的意味においてはほとんどあり得ない —— を言っておられるのではない[13]から，残るトゥングース語派，モンゴル語派のいずれかに属することになる。無名氏『北風揚沙録』(「説郛」巻25所収）には「〔女真〕與契丹言語不通」と記してあり[14]，女真語は Grube 氏の研究[15]によって既知の満州語との差があまり大きくない言語 —— 筆者はこれを満州語の直接の祖語と考え，中古満州語と称した[16]が —— であることを知り得るから，少なくとも満州語あるいはそれに類似する言語ではなく，したがってモンゴル語派か，満州語と差の大きいトゥングース語派 —— こういう言語が存在した可能性はある —— に属する言語であることは明らかであり，一方『魏書』巻100失韋伝に「語與庫莫奚[17]契丹豆莫婁國同」[18]，『旧唐書』巻199北狄伝に「室韋者契丹之別類也」とあり，かつモンゴル族を統一した蒙古部は，唐

代室韋族の一部族である『旧唐書』の蒙兀 mung-nguət，『新唐書』の蒙瓦 mung-ngwa 部であるから，契丹族は蒙古族の一派であり，蒙古系すなわちモンゴル語派の言語を話していたと考えて誤りはなかろう。

第 3 節　漢字表記の契丹語彙

漢字によって表記された契丹語彙は，蒙古における「至元訳語」[19]程の正確さすらないと考えられ，すでに契丹文字資料がある以上，あえてこれを取り上げることは不必要であるかに見えるが，契丹文字そのものの解読が第一歩を踏み出したにすぎない現状においては，かつまたその傍証としても，契丹文字に論及するに先立って契丹語の帰属に関する上述の結論と合致するか否かを確かめなければならない。そこで『遼史』『契丹国志』『燕北録』等の史書所載の語彙について検討を加える必要が生ずるが，その多くを占める人名，地名，部族名，官職名等の固有名詞，特定物の普通名詞については『欽定遼史語解』(1781 年) の如く恣意的になる可能性が多く[20]，かつ紙数もゆるさないから，本稿においては漢語により対訳がなされ，ある程度の確度を有する『遼史』巻 53「嘉儀」と『契丹国志』巻 27「歳時雑記」に記された語彙及び『遼史』巻 31「営衛志」記載の斡魯朶名についてのみ列挙し，能う限りそれに解釈を加えることとする。これらの多くは白鳥博士によって論ぜられ，また村山氏もその論文の 53－56 頁に蒙古文語及び Daxur 語と対比させているが，資料の扱い方その他，少なからざる見解の相異があるので重複する点があっても無意義ではないと考える。

〔史〕= 遼史 (「四部備要」本による)，〔解〕= 遼史巻 116 国語解 (数字は通し番号)，〔契〕= 契丹国志 (国学文庫本による)，〔欽〕= 欽定遼史語解 (ローマ数字は巻数)，〔甲〕= 甲種本華夷訳語 (経厳刊本による)，mo. = 蒙古文語，ma. = 満州語，tung. = トゥングース語，tü. = トルコ語

1　〔史 53〕正旦 ── 國語謂正旦爲〈廼捏咿呪〉，[a]〈廼〉正也，[b]〈捏咿呪〉旦也。　〔解 113〕〈廼捏咿呪〉── 正月朔旦也。　〔契〕正旦 ── 北呼此謂之〈妳捏離〉，漢人譯云，[a]〈妳〉是丁，[b]〈捏離〉是日。　〔欽 X〕aniya inenggi 満州語元旦也。

2　〔史〕二月一日 ── 國語是日爲〈怦里盹〉，[a]〈怦里〉請也，[b]〈盹〉時也，〈怦〉讀若狎，〈盹〉讀若頗。　〔解 114〕怦里盹 ── 怦讀作狎，盹讀作頗，二月一日也，六月十有八日，國俗，耶律氏設宴，以延國舅族蕭氏，亦謂之曰〈怦里盹〉。　〔契〕中和 ── 北呼此節爲〈轄里盹〉，漢人譯云，[a]〈轄里〉是請，〈盹〉是時。　「燕北雑記」瞎里盹。　〔欽〕jalaba 蒙古語已請之謂。

3　〔史〕三月三日 ── 國語謂是日爲〈陶里樺〉，[a]〈陶里〉兎也，[b]〈樺〉射也。〔解 115〕陶里樺 ── 上巳日射兎之節名。　〔契〕上巳 ── 北呼此節爲〈淘裏化〉，漢人譯云，[a]〈淘裏〉是兎，[b]〈化〉是射。　〔欽 X〕taola garbuga 射兎之謂。

4　〔史〕五月重五日 ── 國語謂是日爲〈討賽咿呪〉，[a]〈討〉五，[b]〈賽咿呪〉月也。　〔解 116〕討賽咿呪 ── 重午日。　〔契〕端午 ── 北呼此節爲〈耐 (討) 賽離〉。　〔欽 X〕tob inenggi 満州語〈托卜〉端也，〈伊能伊〉日也。

5　〔史〕七月十三日 ── 國語謂之〈賽咿呪奢〉，[b]〈奢〉好也。　〔解 117〕賽伊呪奢 ── 日辰之好也。　〔契〕中元 ── 此節爲〈賽離捨〉，漢人譯云，[a]〈賽離〉是月，[b]〈捨〉是好，謂月好也。　〔欽 X〕sayin inenggi 満州語吉日也。

6　〔史〕八月八日 ── 國語謂之〈捏褐耐〉，[a]〈捏褐〉大 (sic) 也，[b]〈耐〉首也。〔解 118〕捏褐耐 ── 大首也。　〔契〕中秋 ── 北呼此節爲〈捏褐妳〉，漢人譯云，[a]〈捏褐〉是狗，[b]〈妳〉是頭。　〔欽 X〕ike nur 蒙古語伊克大也，努爾面也。

7　〔史〕九月重九日 ── 國語謂是日爲〈必里遲離〉，九月九日也。　〔解 119〕必里遲離 ── 重九日也。　〔契〕重九 ── 北呼此節爲〈必里遲離〉，漢人譯云，九月九日也。　〔欽 X〕bolori učuri 満州語〈博羅哩〉秋也，〈烏楚哩〉時際也。

8　〔史〕歳十月，十五日 ── 國語謂之〈戴辣〉，[a]〈戴〉燒也，[b]〈辣〉甲也。〔解 120〕戴辣 ── 燒甲也。　〔契〕小春 ── 北呼此時爲〈戴辯〉承恩堂刊本作錄下同漢人譯云，[a]戴是燒，[b]辯是甲。　〔欽 X〕dalgakan 燒也。

9　〔史〕臘辰日 ── 國語謂是日爲〈炒伍侕盹〉，[a]〈炒伍侕〉戰也。　〔解 121〕炒伍侕盹 ── 戰名也。　〔契〕臘月 ── 此節爲〈杪○一作鈔下同離盹〉，漢人譯

云，[a]〈粆離〉是戰，[b]〈囧〉是時，戰時也。　「燕北雜記」呼爲〈粆離〉是戰，〈囧〉是時。　〔欽 X〕čooha yabu 滿州語綽哈兵也，雅布令其行也。

10 〔契〕治盜 ── 北呼爲〈鶻里囧〉，漢人譯云，[a]〈鶻里〉是偸，[a]〈囧〉是時。「燕北録」北呼爲〈鶻里囧〉，漢人譯云，[a]〈鶻里〉是偸，[b]〈囧〉是時。

11 〔契〕旋風 ── 口道〈坤不剌〉七声。　「燕北録」口道〈坤不克〉七声，漢語鬼風也，以禳厭之。「燕北雜記」口道〈坤不刻〉七声。

12 〔契〕跪拜 ── 彼言〈捏骨地〉者，即跪也。

13 「燕北録」戎主太后嚘噴時，但是近位蕃漢臣僚等，幷齊道〈治夔離〉，漢語萬歲也。

14 「燕北録」凡兵馬應是漢兵，多以得勝及必勝二字爲號，諸蕃兵以〈蔑珍思〉三字爲號，漢語熊虎二字也。

15 「燕北雜記」北界漢児多爲契丹凌辱，罵作〈十里鼻〉，〈十里鼻〉奴婢也。

16 「燕北雜記」契丹呼種田，爲〈提烈〉。

17 「燕北雜記」戎主別有鼓十六面，発更時擂動，至二點住，三更再擂，呼爲〈倍其不離鼓〉，是驚鬼。

18 〔史〕有遼始大設制尤密，居有宮衛謂之斡魯朶，出有行營謂之捺鉢 (31 卷)。秋冬違寒，春夏避暑，随水草就畋漁，歲以爲常，四時各有行在之所，謂之〈捺鉢〉(32 卷)。　〔欽 II〕ba na 滿洲語地方也。

19 〔史〕算斡魯朶太祖置，國語心腹曰〈算〉，宮曰〈斡魯朶〉，是爲弘義宮。〔解 137〕算斡魯朶 ──〈算〉腹心拽剌也，〈斡魯朶〉宮也，已下國阿輦至監母皆斡魯朶名，其注語則始置之義也。〔欽 II〕ordo 滿洲語亭也。　〔欽 II〕suwayan 滿洲語黃色也。

20 〔史〕國阿輦斡魯朶太祖置，牧國曰國阿輦，是爲永興宮。　〔解 138〕國阿輦 ── 収國也。　〔欽 II〕geo uniyen 滿洲語騍馬也。

21 〔史〕耶魯盌斡魯朶世宗置，興盛曰〈耶魯盌〉，是爲積慶宮。　〔解 140〕耶魯盌 ── 興旺也。　〔欽 II〕irowa 蒙古語吉兆也。

22 〔史〕蒲速盌斡魯朶應天皇太后置，興隆曰〈蒲速盌〉，是爲長寧宮。〔解 141〕蒲速盌 ── 義與耶魯盌同。　〔欽 II〕fusengge 滿洲語孳生也。

23 〔史〕奪里本斡魯朶穆宗置，是爲延昌宮，討平曰〈奪里本〉。　〔解 139〕〈奪里本〉 ── 討平也。　〔欽 II〕dayilaha 滿洲語已討之。

24 〔史〕監母斡魯朶景宗置，是爲彰愍宮，遺留曰〈監母〉。　〔解 148〕〈監母〉 ── 遺留也。　〔欽 II〕giyamun 滿洲語站也。

25 〔史〕孤穩斡魯朶承天太后置，是爲崇徳宮，王 (sic) 曰〈孤穩〉。〔解 143〕〈孤穩〉 ── 玉也。　〔欽 II〕gu i ordo 滿洲語玉亭也。

26 〔史〕女古斡魯朶聖宗置，是爲興聖宮，金曰〈女古〉。　〔解 142〕〈女古〉 ── 金也。　〔欽 II〕münggü 蒙古語銀也。

27 〔史〕窩篤盌斡魯朶興宗置，是爲延慶宮，孳息曰〈窩篤盌〉。　〔解 144〕〈窩篤盌〉 ── 慈息也。　〔欽 II〕adun 滿洲語収羣也。

28 〔史〕阿思斡魯朶道宗置，是爲太和宮，寛大曰〈阿思〉。　〔解 II〕阿斯 ── 實大也。　〔欽 II〕agoo 蒙古語寛也。

29 〔史〕阿魯盌斡魯朶天祚皇帝置，是爲永昌宮，輔祐曰〈阿魯盌〉。〔解 146〕〈阿魯盌〉 ── 輔佐也。　〔欽 II〕arun 蒙古語絜浄也。

30 〔史〕孝文皇太弟敦睦宮，謂之赤寔得本斡魯朶，孝曰〈赤寔得本〉。〔解 147〕〈得失得本〉 ── 孝也。　〔欽 II〕hiyoošun deribun 滿洲語学順孝也，〈徳哩本〉始也。

31 〔史〕文武百官冊立大石爲帝，以甲辰歲二月五日即位……延慶三年班師東帰，馬行二十日，得善地，遂建都城號虎思斡耳朶 (30 卷)。　〔解 99〕虎思斡魯朶 ── 思亦作斯有力称，斡魯朶官帳名。「金史」大定中，回紇移習覧三人至西南招討司貿易，自言本國回紇鄒括番部所居，城名骨斯訛魯朶 (121 卷)。　〔欽 II〕hüsun ordo 滿洲語呼遜力也，鄂爾多亭也。

以下，上記契丹語資料を，モンゴル語派及び他のアルタイ語族と対比させるについて，第一にしなければならないのは，これら資料の Textkritik であるが，時間的な制約により，諸版本にあたることができなかったので完全を期し得ないにしても，個々の単語対比の個所で挙げる『説郛』巻 86 所収「遼志」の如き『契丹国志』の異本とされるもの，『契丹国志』の「歲時雜記」と『燕北雜記』の如く同一資料に基づくもの等の校合により，正確を期し得ると考える。第二に漢字音のローマ字による転写であるが，これら諸本が，少なくとも 12 世紀以降のものであり，児 ər の成立，2a の如き狎，瞎，すなわち p 入 t 入の混同，全濁の消滅 ── アルタイ諸語の破裂音は二系列であって，中古中国語の如く三系列ではなく，漢字音による表記の場合には例

えば舌尖音においては，全清 t で有声 d を，次清 t‘ で無声 t を表わしているから，3a の陶，淘の使用の如きは全濁 d‘[21] としてではなく，すでに t‘ に変化していたと考えるのが至当であろう ── 等が示す音韻体系はかなり新しいものでなければならないから，村山氏の如く無条件に北京音 ── ウェード式から声調番号を除いたもの ── によることは賛成できないが，小稿「北京語のローマ字表記法に就いて」[22] の初期北方官話音表記法によっても，実際の音と大差はないと考える。なお入声記号 q は本稿の性質上誤解を避けるため ’ に改めた。

nai 廼，迺，妳「正，丁」(1a)

〔欽〕の如く ma. aniya《年》と比較するは不可，村山氏は妳を ni ── これは明らかに二人称代名詞你に対して作られた女性形妳と誤ったもの ── として mo. nigen と対比されているが賛成できない。

mo. nirai《新鮮な》，mong.（i. e. Monguor 語）narǧē《若い，柔軟な》，
ma. niyarhūn《新鮮な》，tü. jaz《春》
と比較さるべきであろう。6b 参照。

nie’-i-er 捏咿唲，nie’-li 捏離「旦，日」(1b)

〔契〕の捏離を「遼志」では担離に作るが字形類似による誤り。〔欽〕は ma. inenggi《日》と比較するが不可，村山氏は捏咿唲旦也，賽咿唲月也 (4b) と明記してあるにもかかわらず捏咿唲 (1b)，賽咿唲 (4b, 5b)，賽伊咿唲（出所不明）の咿唲を抽出して i-r mo. edür とされているが，その理由は不明である。白鳥博士の説の如く〔甲〕1r. 納闌 (舌) na-ran, mo. naran《太陽》と対比させるべきか。正旦は〔甲〕には 3v. 兀都児失你 udu-r si-ni とある。

xia’-li 怦里，瞎里「請」(2a)

〔契〕轄里は「遼志」に瞎里に作り「燕北雑記」も瞎里であるから瞎が正しい。〔欽〕jala-ba は第一音節が ja とはなり得ないから不可。〔甲〕18r には古列 (舌) gu-re「請」とあるが，音韻的に差があり，むしろ mo. qalayi-《目下の者を訪問する，秀でる》と対比すべきであろう。村山氏は触れていない。

puo 皤〔皤をもと皃に作るは或体〕「時」(2b, 9b, 10b)

蒙古文語では p は語頭に立たないが，ウイグル式蒙古文字以外の中世蒙古語資料には語頭に h があり，これはカルムツク (kalm.) ハルハ (xalx.) オルドス (ord.) 等主要な蒙古諸方言では，すでに消失しているが，ダフール (dax.) 方言と，周辺孤立方言，甘粛西南のシエラヨグール (šy.) 語，黄河上流蘭州付近のシロンゴル (šg.) 語，甘粛西部のモングオル (mong.) 語にはその痕跡をとどめており，かつトゥングース語派の p, f, h, o に対応 ── トルコ語派では o ── しているので[23] o<h<φ<p とその変化を跡づけることができるから，契丹の p が中世蒙古語の h と対応するとすれば，アルタイ基語の p と直接結ばれることとなる。

〔甲〕3r. 桓 hon「年」，LG[24] hon《年》，MA[25] hon《id.》，mo. on《id.》，
mong. fän《id.》，šg. huan《id.》，ma. fon《時》
これについては白鳥博士も村山氏も触れていない。

tau-li 陶里，淘里「免」(3a)

〔契〕淘裏を「遼志」は淘里に作るから里が正しい。次の xua と共に Schott 氏，白鳥博士は蒙古語と対比され，村山氏もこれによっている。

〔甲〕6r. 討来 tau-lai, mo. taulai, dax. t‘aulē, mong. t’ūl, tü. tabïsγan

xua 樺，化「射」(3b)

白鳥博士は χarbu->χaba>χawa>χwa とされたが[26]，〔甲〕20r. 合 (中) 児卜 qa-r-bu「射」mo. qarbu-《射る》，qa-dγa-《刺す》，kalm. χa-, χarwa-, mong. χarmu- の語根 qa- と対比さるべきであろう。

tau 討「五」(4a)

〔契〕耐は「遼志」に討に作り〔史〕も討であるから字形類似による誤り。〔欽〕は tob《正しい》としているが，討五と明記してあるから不可，白鳥博士は mo. tabun と対比され，村山氏もこれによっている。

〔甲〕塔奔 22r. ta-bun, mo. tabun, dax. t‘āu, mong. t’āwen

sai-i-ər 賽咿唲，賽伊唲，sai-li 賽離「月」(4b, 5a)

〔欽〕sayin《好い》は月と明記してあるから不可，白鳥博士が賽咿唲を mo. sara と対応されたのに対し，村山氏は賽と咿唲に分けて考え，賽離の方のみ mo. sara と対比しているが，白鳥博士によるべきである。

〔甲〕1r. 撒剌 sa-ra, mo. sara, dax. saru:l, mong. sara
舌

shə＜śia 奢，捨「好」

〔契〕捨を「遼志」は拾に作るが，捨は〔史〕の奢と同音（異声）であるから捨が正しい。〔欽〕inenggi は奢好也，捨是好と明記してあるから不可，村山氏は奢，賽伊「好」とされるが，何に基づいているか不明，賽伊は賽伊咿唲（出所不明）を sayin ädür と考えられたためであろう。これは元朝秘史（以下秘史と略称，「四部叢刊」本による。ローマ数字は巻数を示し，続集巻一，二は XI，XII とする。）XI 27r. 塔訥安 ta-nu-an，撒亦 sa-i，兀者速 u-je-su，客延 ke-yen の sa-i, mo. sayin, ma. sayin, tü. saγ《健康な》と比較さるべきである。

nie'-xə' 捏褐「犬，狗」(6a)

〔史〕，〔解〕の犬は〔契〕に狗とあるから犬の，〔契〕の担は捏の字形類似による誤り，〔契〕には担をさらに擔に作る版本もある。〔欽〕ike すなわち，mo. yäkä は犬の誤り，大から来ていて勿論誤りである。白鳥博士が mo. no-qai《犬》と比較されたのは正しく，村山氏もこれによっている。

〔甲〕6r. 那孩 no-qai, mo. noqai, dax. noγo, mong. noχue, šg. nohué

nai 耐，妳「首，頭」(6b)

〔欽〕の nur すなわち mo. niγur と比較しているのは正しい。村山氏は触れていない。

〔甲〕23r. 你兀児 ni-u-r, mo. niγur, mong. niūr

bi'-li-chi-li 必里遅離「九月九日，重九日」(7)

漢訳は九月九日，重九日としてあるが月，日という語が含まれていないから，その別名であると考えられ，mo. bilči-～bälči-《分かれて追う，分かれた方向へ追い散らす，放牧する》という動詞の nomen deverbale, bilčigür ～bälčigäri kalm. beltšēri, MA belčil《牧場》，tü bältir《岐路》と対比さるべきであろう。もし二語よりなるとすれば，アルタイ語では r, l が語頭に立つ可能性は少ないから，〔欽〕の如く bi'-li と chi-li を分けて考えるべきであろうが，bolori《秋》は女真語では bolo-erin すなわち秋＋季節であり，他のトゥングース語においても Kondogir bolani, Vilui bolono, Anadyr boloni, Uda bolo, Solon bolo, Manägir boloni, Gold, Olča bōlō が示している如く共通基語形としては *bolo が推定され，母音の差が説明し難い。

dai 戴「焼」(8a)

mo. tüimär《大火事》の語根 tüi-，あるいは mo. tülä-《焼く》が考えられるが，語頭子音が有声であるから，ma. deiji-《焚く，焼く》の方が近い。

la' 辣，辞「甲」(8b)

〔契〕辯は「遼志」では辨に作るが，辣→辨→辯→の順に誤ったもの，何語の何にあたるか解し難い。〔甲〕10r 忽牙黒 qu-ya-q 「甲」との関係は考えられない。
中

chau-u-ər 炒伍価，chau-li 抄離 (9a)

〔契〕粆離の粆は集韻に「師加切音沙」とあるから，紗と同じく sha であるが，「遼志」は抄に作り，〔史〕の炒と同音（異声）であるから抄の誤りであろう。〔欽〕は čooha と対比させているが，秘 XI 20r. 察兀児 ča-u-r「征」と対比さるべきであろう。これにあたる蒙古文語形はない。〔史〕の nie'-i-ər, sai-i-ər, chau-u-ər と〔契〕の nie'-ri, sai-ri, chau-ri とは方言差を示すものか。

xu (gu)-li 鶻里「偸」(10a)

村山氏は mo. qulaγai《盗賊》と対比し「Ramstedt に依れば，これは quluγ- 「盗む」からつくられた名詞 (KW 196a)」とされているが，動詞は

mo. qulaγu-《盗む》である。ma. hūlha-

xuən-bu-ke'＞kəi' 坤不刻（克）「鬼風」(11)

〔契〕の刺は「遼志」刻に作るから刻の字形上の誤り，xuən-bu は mo. külbäri-《ひっくり返る，変化する，騒ぐ》～kürbü-《振り向く，変化する》と比較される -n が -l, -r を示すのは普通である。kə'～kəi' は〔甲〕lr. 克 kei「風」，mo. käi《空気》，mogh. kei《空気，風》，mong. k'i《風》と対比される。

nie'-gu-di 捏骨地「跪」(12)

mo. niγura-《屈む》，ma. niyakūra-《跪く》と対比さるべきか。蒙古語《跪く》は〔甲〕18r. 莎葛㑹 so-go-d mo. sögüd- であるが，捏はあるいは莎，梭，索，瑣，雪等の誤りで so-gu-di であるか。

zhi-kuei-li 治夔離「萬歳」(13)

解し得ず。

ləu-zən-si 蔞珍思「熊虎」(14)

吉林省扶餘県拉林河畔石崴子にある女真文漢字対訳の「大金得勝陀頌碑」(1185年) 碑面漢文 22 行の「桓桓之士，如熊如羆」の女真語訳，碑陰 22 行の čau-ha i lau-la maŋ-ga...《軍士の勤めること激しく》とあり，lefu ere tasha ere とある lefu《熊》tasha《虎》と関係あるか，この女真語は満州語が同形である他，トゥングース諸語と関係なく外来語と考えられるが，起源は不明である。なお，百二十巻本説郛では，この条を「諸番兵以〈蔞珂忍〉号，漢語龍虎二字也」としていて，low-ke-ren と龍虎の関連が更に解し難くなっている。

shi'-li-bi 十里鼻「奴婢」(15)

里は錯入で mo. sibägčin《奴婢》と対比されるべきか，あるいは mo. silbi《脛，踝》と関係あるか。

ti-lie' 提烈「種田」(16)

白鳥博士の説は正しく，mo. tari-《耕作する，種を播く》，ma. tari-《種を播く》tü. tarï-《id.》と対比される。

pei-ki-bu-li 倍其不離「驚鬼」

pei-ki は秘 II 17v. 赫乞 he-ki 「頭項」，LG heịkin《頭》，MA hekin《id.》，mong. xęgi《源泉，発端》，mo. äki(n)《水源，根本》と対比される。äkin は kalm. ekn̥《始，起源，水源，泉》，xalx. exi《始，源》，ord. eχ^{k}χe《源泉》であるがダフール語では eki《頭》で，かつ満州語の fehi《脳》と同根であるから，契丹語 peiki も《頭，脳》を意味するであろう。bu-li は mo. büriyä-《吹く》と比較さるべきか，あるいは鼓も訳音で bu-li-gu を mo. bürgi-《驚く》と対比すべきか。

uo-lu-tuo 斡魯朶「宮営，宮」(18, 19 etc.)

〔甲〕8v. 斡耳朶格児 o-r-do ge-r 「宮」の o-r-do mo. ordo～orda tü. orda

na'-buo'＜bua' 捺鉢「行営，行在之所」(18)

kalm.（イ）nemnə̆-＜ein frierendes tier einhüllen, bedecken＞同じく（ロ）nemn̥-＜sich einhüllen, sich schützen (gegen regen, sturm)＞の名詞形（ハ）nemn̥＜schutz, zufluchtort (gegen regen, sturm, kälte)＞及び（ニ）nemūr＜zufluchtsort, versteck, vor regen od. feinden geschützter platz＞（ホ）nemn̥gə＜hülle, verhüllung; dach, decke＞（ハ）の出名動詞（ヘ）nemn̥lə̆-＜sich verstecken, schutz finden＞; ord. nemne-＜couvrir les animaux, la nuit, pour les garantir du froid＞〔kalm.（イ）〕, nömörgö＜manteau＞〔kalm.（ホ）〕; dax. nembu-《被う》，nembelge《屋根》; mong. niämвie＜se couvrir, porter un habit étendu sur les épaules comme un manteau＞, niämвi-erge＜manteau, caban, couverture＞, ma. nemerku《雨合羽》，nemerhen《簑》，tü. jap-＜zudecken, verdecken, zuhüllen＞，涵芬楼秘笈四集，華夷訳語 IIa 14r. 兀祿 u-lu 額児古古 e-r-gu-gu 兀祿 u-lu 粘別古 nem-be-gu 兀該倘 u-gai-

bui の nem-be-gu 「蓋」, MA morinu nemele《馬被》(MSM p. 239a) と対比される。

村山氏は秘 I 15v. 粘不列格児 nem-bu-le ge-r 「庵房子」を対比しておられるが，Kowalewski の *Dictionnaire Mongol-Russe-Français*, p. 217b では ämbül-ün gär <соломенная хижина《藁葺の小舎》, hameau construit en paille> としてあり，また蒙古源流でも ämbülä で語頭の n が脱落しているから同一の語根としては考えられない。

suan 算「心腹」(19)

白鳥博士は mo. sanaγa と対比され，村山氏もこれによっている。音韻的には〔欽〕の ma. suwayan《黄色》が近いが心腹と明記してあるから誤りである。mong. suäna- "calculer, compter" と比較さるべきか。

guo'-a-nian<lian 國阿輦「牧? 収?」(20)

訳音の方法に疑問があり，意味も〔史〕は牧に〔解〕は収に作るが，いずれかが字形の類似からする誤りである。〔欽〕は不可。

ie-lu-uan 耶魯盌「興盛，興旺」(21)

ma. yende-《火が盛んになる，興る》と関係あるか，〔欽〕は不可。

pu-su-uan 蒲速盌「興隆」(22)

〔欽〕は ma. fuse-《繁殖する》の連体法 participium 及び作為者名詞 nomen actoris の fusengge と対比しているが，-uan を -ngge とした点を除いては正しい。村山氏も参照として ma. fuse- を挙げられ，pu-su-uan (怨 yüan とあるはおそらく誤り) を mo. ösü-buri 「成長，繁殖」*fösü-buri, kalm. öswr 「同」と対比されているが，ösü- は中世蒙古語資料でも語頭に h を持った例がないから，Ramstedt 氏の KW p. 301, ösχə<wachsen, zunehmen, grösser od. mehr werden, aufwachsen [ösü-, ös-; tü, ös id. ma. fuse- id.] によられたのであろうが，他に傍証がなければ危険である。私は Ibn-Muhanna の語彙[27]の husun《精液》と比較さるべきと考える。

duo'-li-bən 奪里本「討平」(23)

村山氏は元朝秘史 tao-li- 倒里「擄」(征服する) とされるが，これは秘 VIII 1r. 倒里周 dau-li-ju 等を指すのであろうが，I 23r., 40. v. 倒兀里周 dau-u-li-ju 「擄着，擄着」と da'ūli- を示す方が多くこの対比には賛成し難い。〔欽〕は満州語 dayilaha《征伐した》としてあるが，duo'-li を ma. dayila- と対比させている点によるべきであろう。

mo. dayila《戦う，討つ》，ma. dayila-《征伐する，討つ》

gian<gam-mu 監母「遺留」(24)

〔欽〕は ma. giyamun《駅，宿場》に比定しているがむしろ ma. gemun《城廓》と対比すべきである。蒙古語でこれに対応するものはない。

gu-uən 孤穏「玉」(25)

〔史〕の王は玉の誤，〔欽〕は gui《玉の》に比定しているが，Manägir gägin, Gold, Olča geóṅ《銅》，ma. giowan《id.》と比較さるべきであろう。

ny-gu 女古「金」(26)

〔欽〕は mo. mönggün《銀》に比定し，村山氏も参照として挙げられるが，音韻的に無理がある。

uo-du'-uan 窩篤盌「孳息」(27)

〔解〕の慈息は誤り，〔欽〕の ma. adun《収群》に比定するは意味の上からも，音韻上からも不可，mo. udum《血統》，udumčir《子孫》の語根 udu- と比較さるべきである。

a-si 阿思「寛大」(28)

〔解〕の實大は寛大の誤りである。『遼史拾遺』は陳土元『諸史夷語』の「阿思者，華言寛大也，阿思一作阿斯，又作阿厮」を引いて「鶚案，此條史

作阿斯，寛大誤作實大」としている。〔欽〕の mo. aɣuu《寛大》は音韻を無視していて取り難い。mo. ma. asuru《極めて，最も》と比較すべきであろう。

a-lu-uan 阿魯盌「輔祐」xə-lu-uan 何魯盌「輔佐」(29)

〔史〕の阿と〔解〕の何といずれが正しいか不明，〔欽〕の arun すなわち mo. ariɣun《清潔》は他の場合と同じく語釈を無視していて取り難い。

chi'-shi'-də'-bən 赤寔得本「孝」(30)

〔解〕は得失得本 de'-shi'-də'-bən に作るが『遼史拾遺』は「鶚案，此條史誤作得失得本」としているがその根拠については述べられていない。道宗哀冊篆蓋の「孝」と考えられる詞字によれば〔史〕の方が正しい。〔欽〕は満州語 hiyoošun deribun に比定しているが，ma. hiyoošun は孝順 xiau-shuən の借用であるから，本来の満州語では senggime《友愛，親和》を当てるべきであって取り難く，deribun《始め》も不可。mo. čisun《血》の denominal čisu-da-, čisudu- と関係あるか。

xu-si 虎思，gu-si 骨斯「有力」(31)

mo. küčün mong. kuɒźi ma. hūsun, Oroci kusun, Gold kusun, tü. küč

以上の少ない資料によって，不完全ながら知り得た契丹語は，語頭に P を有する点，母音の音価等の点において，蒙古文語とは明確に異なる特徴を示してはいるがモンゴル語派に帰属していることは否定できない。多くの点において契丹語はダフール語，モングオル語，特に後者に近似しているように考えられる。しかしそれは他に多少の根拠はあるが直観的にそう感ぜられるだけであって科学的な証明は契丹文字が完全に解読された後を待たなければならない。かかる観点に立つ私が村山氏の論文を読んで最初に感じた疑問は，解読された契丹語があまりにも蒙古文語的である点であったことは了解して頂けるであろう。

第 4 節　契丹大小字

契丹文字に大小二種の文字があることは遼史に「〔神冊〕五 (920) 年春正月乙丑始製契丹字……〔九月〕壬寅大字成，詔頒行之」(2 巻)，「太祖見器重，及製契丹大字，突呂不贊成為多」(75 巻突呂不伝)，「甫七歳能誦契丹大字」(75 巻蒲魯伝)，「始太祖制丹大字，取諸部郷里之名，續作一篇著于巻末」(89 巻庶箴伝) とあり，「回鶻使至，無能通其語者，太祖曰迭剌聰敏可使遣迓之，相従二旬，能其言語書，因制契丹小字，数少而該貫」(64 巻) とあるのによって知り得るが，他の史書には薛居正 (912－81) の『旧五代史』(974 年) に「〔太宗〕本名耀庫濟，後慕中華文字遂改焉」とあり，王溥 (922－82) の『五代会要』(961 年) に「契丹本無文字，惟刻木為信，漢人陥蕃者以隷書之半，就加増減，撰為胡書，同光之後，稍稍有之」とあり，欧陽修 (1007－72) の『新五代史』に「至阿保機稍併服諸小国，而多用漢人，漢人教之以隷書之半，増損之，作文字数千，以代刻木之約」[28] とあり，秦再思の『紀異録』に「渤海已平，乃製契丹大字三千余言」[29] と大字についてのみ記してあって小字については述べられていない。これらの記載によれば，漢字を改め作った表意文字的なものが太祖の製した契丹文字で，明抄『説郛』所収『燕北録』の牌子に記された勅走馬の三字[30]，及び熱河省出土の成吉思皇帝聖旨牌の走馬の二字[30] 等がすなわちそれであり，契丹小字は表音的要素の多い文字，すなわちこれから述べようとする契丹哀冊の文字と考えて誤りはあるまい[31]。

第 5 節　慶陵哀冊の契丹文字

遼陵出土の哀冊で今見ることのできるものは，

漢文のもの

1　聖宗文武大孝宣皇帝哀冊并蓋　　1031 年
2　聖宗欽愛皇后哀冊并蓋　　1058 年
3　興宗仁懿皇后篆蓋　　1076 年
4　聖宗仁徳皇后哀冊并蓋　　1081 年

5　道宗仁聖大孝文皇帝哀冊并蓋　　1101年

6　道宗宣懿皇后哀冊并蓋　　1101年

契丹文のもの

1194字（9行改刻があるがそれは数えない）の哀冊とその篆蓋，620字の哀冊とその篆蓋及びケルヴァン氏手写の856字と583字の二つの哀冊の四つであるが，先に触れた王静如氏の研究により，

I　道宗哀冊

A　道宗篆蓋

II　道宗宣懿皇后哀冊

B　道宗宣懿皇篆蓋

III　興宗哀冊

IV　興宗仁懿皇后哀冊

であることが証明されている。

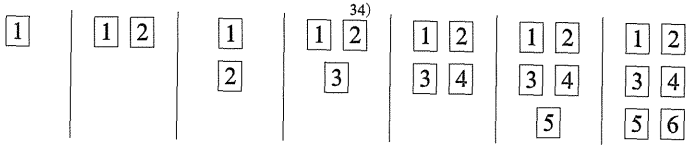
契丹文字（小字）の構造については哀冊と篆蓋を照合すれば，一つの文字が一個ないし数個の字が集まって構成されていることは明瞭であるが，その一つ一つの構成要素を元字，元字を合わせて一つの意味を表わす詞をなしていると考えられるものを詞字と名づけると，王静如，羅福成諸氏により漢語と対照された詞字は，不明確なものをも含めてではあるが，すでに80字に達し[32]，それらを構成する元字に分解して個々の元字により分類すれば，例えば数詞，月，日等の如き，漢字を変形したと考えられる表意文字[33]と，名詞の格及び動詞の変化を示す明らかに表音的な元字を含む表音文字の二種からなっているが，表意文字の音価はもちろん，表音文字はついてもそれが音素文字 lautschrift であるが，音節文字 silbenschrift であるかすら不明であって，厲鼎煊氏の如く，

> 夫契丹之有文字，遠在西夏金源之前，則考釈其音義，誠視考西夏金源文為難；況西夏文尚有番漢合釈掌中珠等書可供参証，金源文亦有華夷訳語稍資比勘，至於契丹文則並此等易於尋検之参考書而亦無之，其不易籀詮，亦勢理之必然者矣。（熱河契丹国書碑考）

と言わざるを得ない。

村山氏の研究で何と言っても一番画期的なのは，契丹文字を突厥文字に結びつけたことであるが，約40字の突厥文字と，後述の如く200字に余る表音元字，すなわち契丹アルファベットとの比較は当然音価の同じ文字が何らの条件も伴わずに異なった幾つかの形で現われ，また幾つかの装飾が付されているという非合理的な結論に到着する結果となり全面的には賛成し難い。しかし私は突厥文字との関係を否定し去るものではなく，白鳥博士が「契丹人は自国の文字を製する以前に此等の文字〔突厥・回鶻〕をも知りたるべければ，多少此等の文字に負ふ所ありしならん」（「史学雑誌」9編12号，53頁）と書いておられる程度には，「〔天贊〕三（924）年……〔九月〕甲子詔礲闢遏可汗故碑，以契丹突厥漢字，紀其功」（『遼史』2巻）の記載からも考えているつもりである。

IとA，IIとBとをそれぞれ比較すれば，元字の組み合わせ方は，



の配列によっていると考えるべきと思うが，村山氏は，

1）　b^it^i, q^ony, t^er^e, q^at^{un} üeγ^e [1][2]

q^it^ań [1][2] [3]

2）　y^ek^e, t^ol^i [2][1]

b^ogd^a, $m^og^ay^i$, saraγ^ul [2][1] [3]

m^asid^aqu [2][1] [4][3]

3）　$q^ar^an^y$ [1] [2][3]

4）　$b^en^gk^u$ [3] [1][2]

と四様に読まれるが，saraγul は明らかに誤りであり，yeke，boγda の如きは篆蓋には k^2-y^2，g^2-b^2-d^1. の順に書いてあるのをいかに解すべきか，かかる配列の可能性そのものを否定はしないが，氏の推定音価を，私の表にあてはめた結果は否定的ならざるを得ない[35]。

第6節　哀冊に使用された契丹小字の組成

道宗哀冊は性質，時代の不明な改刻があり，興宗哀冊，仁懿皇后哀冊は原拓を見ることができないから，以下道宗宣懿皇后哀冊を分析した結果を記し契丹文字解読の資料とする。30行で各行詞字の数は，

1 (7), 2 (32), 3 (3), 4 (18), 5 (30), 6 (23), 7 (4), 8 (18), 9 (14), 10 (28), 11 (28), 12 (10), 13 (22), 14 (24), 15 (20), 16 (21), 17 (17), 18 (21), 19 (27), 20 (9), 21 (27), 22 (15), 23 (27), 24 (25), 25 (28), 26 (29), 27 (26), 28 (27), 29 (26), 30 (14)

計620，元字総数1679であるが，元字の種類としては何個あるであろうか，ここで問題となるのはその書体である。篆蓋の書体と哀冊のそれとは明らかに異なるが，哀冊の中にも三様の書体，すなわち筆画の明瞭な楷書に類するもの，やや形の崩れた行書に類するもの，筆画の判定に苦しむ草書に類するものがあり，これが解読をさまたげている一つの大きな原因となっているが，いかなる草書体が，いかなる楷書体にあたるかは，その元字が詞字の中で占める位置によって判定し得るものが少なくない。

哀冊について言えば元字の総数は327字あるが，そのうち何個の表意元字が含まれているか不明であるにしても，少なくとも200個に余る表音元字を持っていると考えられ，このことは必然的にこれらが音節文字であることを示している。そこで考えられるのは蒙古語の十二字頭である。a, aị, aụ, ab, aγ, as, ad, ar, al, am, an, ang の12種の字頭が示す如く，蒙古語の音節はC+V+C形であって，初子音は q (k), γ (g), t, d, h<*p, b, č, ǰ, š, s, ng, n, m, r, l, y 及び零形，母音は a, ä, i, o, ö, u, ü，末子音は γ (g), d, b, s, ng, n, m, r, l, ị, ụ 及び零形であり理論的に可能な音節は $17\times7\times12=1428$ である。もちろんこの音節のうち普通現われるものは約350であるが，これに比べれば契丹表音元字の数は決して多くはない。

出度10回以上の元字の各書体ならびに，詞頭，詞中，詞尾及び単独で表われる回数を表示すると（151－153頁の表），多くの元字はその種類によって詞頭詞中詞尾に偏在していることがわかるが224，108，100の如く語頭にのみ表われる元字は母音もしくはpを語頭に持つ音節であると考えられ，また頻度によって224，108はaあるいはäであろうと推定し，さらにそれを個々の詞にあてはめ当否を定めるという方法によってこそ，正しい解読がなされ得ると思う。多少の文字の音価は推定してはいるが，その発表は他日にゆずり一応本稿を終えることにする。

〔附記〕本稿は1951年7月1日，大阪外国語大学におけるウラル・アルタイ学会例会で発表した同題の報告草稿を補訂したものである。なお資料を貸与下さった石浜純太郎先生に厚く御礼申し上げます。

1) 厲鼎煊「熱河契丹国書碑考」(「国学季刊」3巻4号，1932年，12 m.)；王静如「遼道宗及宣懿皇后契丹国字哀冊初釈」(「国立中央研究院歴史語言研究所集刊」3本4分，1932年，467－478頁)；同「契丹国字再釈」(「史語所集刊」5本4分，1935年，537－543頁)；山路広明「契丹大字考」(「浮田和民博士記念史学論文集」1943年，313－322頁)；同「契丹語の十干に就いて」筆者未見；羅福頤「契丹国書管窺」(「燕京学報」37期，1949年，12 m.)。

2) 出村良一氏がすでに契丹文字を解読したと報ぜられたが，その後間もなく他界されたので，その内容については知り得ない。また島田正郎氏が解読の鍵をつかまれたと聞くが未だ発表されていない。

3) 近く発表予定の小稿「Mongolo-Turcica ── アルタイ比較言語学序説」参照。

4) 厲鶚 (1692－1752) の『遼史拾遺』(1743年) 巻23，24「国語解，同補」，楊復吉の『遼史拾遺補』巻5「国語解」はこれらの諸書を引いている。

5) Klaproth, Heinrich Julius (1783－1835); Asia Polyglotta, Paris, 1823, p. 294; Schott, Wilhelm (1802－1889); Kitai und Karakitai; ein Beitrag zur Geschichte Ost und Innerasiens, 1879.
白鳥庫吉 (1865－1942)「東胡民族考」(「史学雑誌」21－24編，1910－1913年)，同「西域史上の新研究」(「東洋学報」2巻，1913年)；『西域史研究』上 (1941年，226－8頁)；本章第4節。

6) 趙崡「石墨鐫華」巻6；王昶 (1725－1807)『金石萃編』巻154；「史学雑誌」21編2 (1910年) 図録。

7) 林泰輔『朝鮮通史』(1912年) 66頁。

8) 羽田亨「契丹文字の新資料」(「史林」10巻1号，1925年) なお解読されてはいない。

9) 慶陵には聖宗 (983－1030)，興宗 (1031－1054)，道宗 (1055－1100) 及び各皇妃が葬られていて，東・中・西の三陵に分かれているが，発掘の状況が明らかでないため，三帝の陵をそれぞれいずれの陵に比定するか，説が分かれている。中陵についてはL. Kervyn氏は "Le tombeau de l'Empereur Taotsoung des Leao, et les premières inscriptions connues en écriture K'itan," *Le Bulletin Catholique de Pékin* 118, 1923, T'oung Pao XXII4, 1923. で哀冊を道宗のものと考えたので道宗陵とし，熱河で長く伝道していたベルギー人P. Joseph Mullie師は "Les sépultures de K'ing des Leao，遼慶陵" T. P. 1934. で聖宗陵としたが，王静如氏は前掲「契丹国字再釈」でKervyn氏手写の契丹文哀冊を興宗のものと論定されたから，中陵は興宗陵であることは明らかである。他の二陵については，私は種々の理由から東陵を道宗陵に，西陵を聖宗陵に比定する。1930年10月18日から23日にかけて三陵を踏査された鳥居龍蔵博士は「遼代の壁画について」(「国華」41編9－12号，1931年，『満蒙を再び探る』1932年，303－350頁) で東，中，西陵を，それぞれ興宗，聖宗，道宗陵とされているが，従い難い。1931年8月19日及び1939年8，9両月にわたり，この地を調査された田村実造博士は「遼代に於ける徒民政策と都市・州県制の成立」(「満蒙史論叢」Ⅲ，1940年，127頁) において，東陵を聖宗，西陵を道宗と推測し，中陵は従って興宗陵であると書いておられるが，その根拠について述べておられない。なお村田治郎博士も『満州の史蹟』(1944年) において同じく結論しておられる。田村実造「遼朝帝后の哀冊と慶陵 ── 哀冊出土の経過と三陵の比定 ──」(「満州学報」7輯) は未見。

10) これより先1913年林西県長某が発見，翌14年発掘しているが，当時の状況については不明である。その後1930年時の熱河省政府主席湯玉麟氏が，慶陵の碑石17基を省城に運ばせたまま，一時行方不明となったが，1932年3月，田村博士の手によって奉天商埠地の湯佐栄 (玉麟の息) 邸の空地から発見された。鳥山喜一「奉天に於ける契丹哀冊に就いて」(1932年12月京城帝国大学史学会講演『満鮮文化史観』1935年，101－118頁)。

11) 全文を記せば「契丹小児初読書，先以俗語顚倒其文句而習之，至有一字用両三字者。頃秦使金国時，接伴副使秘書少監王補，毎為予言以為笑。如「鳥宿池中樹；僧敲月下門」両句，其読時則曰：「月明裏，和尚門子打；水底裏，樹上老鴉坐」大率如此。補錦州人，亦一契丹也」。

12) 前掲「東胡民族考」に契丹語として108の語を挙げられた後に続く文。

13) 白鳥博士は前掲「東胡民族考」においてKlaprothの "Asia Polyglotta", W. Schottの "Kitai und Karakitai" を紹介批判され「契丹が既に純然たるTunguse種にもあらず，又蒙古種にもあらずとせば，そは必ず此二人種の雑種と認められたるは，Solon及Dakhurなるが故に，契丹は此二民族の中何れかに該当すべき者なり。」(872頁) と述べ次いでダフール・ソロンの言語，民族に関するLeopold von Schrenck, Ivanovskii, P. Schmidtの説を紹介，数詞の比較をされ，契丹の三数詞 ── 私は五を除き疑問をもっている ── との関係から「従つて契丹民族が今日のDakhur〔の〕祖先にして，蒙古を骨子とし之にTungseの元子を加味せる雑種たることを推知せらるべし」と結論されている。これら設論の当否は別として，二語派の混合，ないし中間的言語を考えておられたのではないことは明瞭である。

14) 『遼史拾遺』巻18「属国表」に引用してあり，宇文懋昭の『大金国志』(1234年) 39巻「初興風土」の項もこれに基づいている。

15) Wilhelm Grube (1855－1908), *Die Sprache und Schrift der Jučen*, Leipzig, 1896，女真文字の解読はこれによって不完全ながら完成され，後に残されている問題は言語学的研究の対象としてのみ重要であるかの如く，考えられがちであるが，これは誤りであって，羅福成，安馬彌一郎氏等の研究にもかかわらず，なお女真文字金石文で完全に解読されているものは一つもないといっても過言ではあるまい。

16) 小稿「満州語と女真語」(「神戸言語学会報」第1号，1949年，本書第5章)

17) 内藤湖南博士は (1866－1934) 宋板魏書や周書49巻異域伝に厙莫奚とあり，厙が正しいとされた。

18) 同じく魏書に「豆莫婁國在勿吉國北千里，去洛六千里，北扶餘也」とあるのと矛盾するかに見えるが，豆莫婁國が，北扶餘の故地にあると解すべきであろう。

19) 石田幹之助「『至元訳語』に就いて」(「東洋学叢編」1934年)；竹内幾之助「至元訳語に表はれたる支那語音」(支那語学報」第3号，1936年)。

20) 白鳥博士は「契丹の言語に関しては，乾隆帝の勅選に係る遼史語解ありて遼史に見えたる名称の殆ど全部を解説せり。然れども此書は同時に編纂せられたる金史，元史の語解と均しく，最も杜撰を極めたるものにして，信拠するに足るもの少く」「東胡民族考」(「史学雑誌」24編7号，854頁) と述べ例証を挙げておられる。

21) 全濁「並」「定」「羣」等が，b' d', g' 等であったか否かについては，私は多少疑問を持っている。

22) 「神戸外大論叢」2巻1号 (1951年)。

23) G. J. Ramstedt, "Ein anlautender stimmloser labial in der Mongolisch-türkischen ürsprache", *Journal de la Société Finno-ougrienne*, XXXII2, Helsingfors, 1916.

P. Pelliot, "Les mots à h initiale, aujourd'hui amuie dans le mongol des XIII^{e} et XIV^{e} siècles", *Journal Asiatique*, 1925, pp. 193－263.

Н. Н. Поппе, Записки Коллегии Востоковедов при Азиатском Музее Академии Наук СССР. т. Ш. в. 2 Ленинград, 1928, стр. 193－263.

24) ライデン語彙 Leidener Glossar 1245年頃のアラビア文字による中世古語資料 N. N. Poppe, "Das mongolische sprachmaterial einer Leidener Handschrift",

(Izvestija Akademii Nauk SSSR, 1927－1928) の転写による。

25) Zamaḫšarī (－1143) の Muqaddimat al-Adab の略称。N. N. Poppe, Mongol'skij Slovar' Mukaddimat al-Adab, Leningrad, 1938 (以下 MSM と略称) の転写による。

26) 白鳥庫吉「高麗史に見えたる蒙古語の解釈」(「東洋学報」18巻2号，1929年，204頁)。

27) 14世紀初のアラビア文字による蒙古語資料 П.М. Меліоранскій: Арабъфилологъ о монгольскомъ Языкъ (Записки восточнаго Отдѣвленія Имлераторскаго Русскаго Археологическаго Обшества, XV С.-Петербургъ 1904, стр. 75－171); MSM pp. 432－451.

28) 陶宗儀『書史会要』(1376年) にもほぼ同文あり。

29) 『契丹国志』巻23国土風俗の条にもほぼ同文あり。

30) 153頁図版参照。

31) 白鳥博士は「大字は小字に比して画数も多かるべしと思はるれば此に挙げたる〔書史会要の〕五字は小字の方に属すべきものにや。」(「契丹女真西夏文字考」931頁) と書いておられるが，契丹哀冊が発見される以前の説であるから，問題とはなり得ない。

32) 王氏は前掲「初釈」において53詞字，「再釈」でこれに19詞字を加え計72詞字の意味をあてられ，羅氏は「遼陵石刻集録」において十数字を加えられた。

33) 女真文字における表意文字は明らかに漢字を基としているが，契丹文字においてはそれほど明瞭でない。

34) II 10 (15) の如く [1] / [2][3] の如き配列によるものもある。

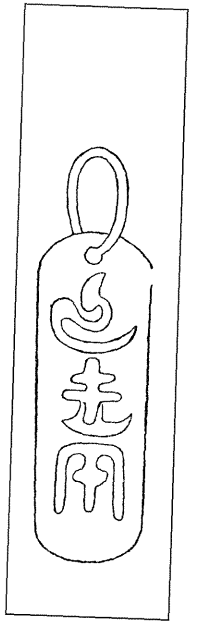
35) 村山氏の論説に対する疑問は，細かい点にまで触れればまだ数個所あるが，最後に48頁脚註 (1) の「第一字を除いてはそれらは女真文字であると私は考えたい」については一言触れる必要があろう。女真文字では勅は arawa-gi (Grube の 576，印刷の関係で文字は略す)，走は ya-bu (Grube 422)，馬は morị-in (Grube 138)，急は hūbi-ji (Grube 675) であるから明らかに誤りで，これらは上述の如く契丹大字であると筆者は考えているが，かかる簡単な事実を誤記されることを氏のために遺憾とする。

番号	書体				出度数					
	篆書	楷書	行書	草書	詞頭	詞中	詞尾	単独	計	
213	仐	仐			39	6	9	—	54	△印はI及びAより補う 兆九 2 (23) 30 (1) 几朳又 1 (5) 24 (19) 26 (6), 27 (13), 28 (23), 30 (12)
324		仆	仆		9	39	3	—	51	
132	反△	及	及△		8	18	16	—	42	
43		为	为		8	27	6	—	41	
103	冂	几			19	11	11	—	41	
127	又	又			4	6	30	—	40	叔北穴羽 6 (3) 11 (6) 24 (21), 26 (8), 27 (15), 28 (25), 30 (14)
224			仐	㇀	37	—	—	—	37	
288		丙			12	12	11	—	35	
30		比	比	比	8	12	14	1	35	
93		与	与	与△	—	1	33	—	34	夬炎当 6 (7) 13 (6)
3			本		5	10	14	2	31	
263	木	朳	朳		—	9	21	—	30	杰仇廾平引 6 (8) 27 (6)
49	夾△	夾			2	11	15	—	28	
187	朩	朩			18	3	7	—	28	毛仲几 6 (13) 6 (17)
264	丹△	丹			6	13	8	—	27	
239		平			—	24	2	1	27	仲廾平又 8 (5) 25 (1)
112		引			12	8	7	—	27	
201		伏			3	1	21	—	25	由又 11 (19) 13 (19) 27 (4)
108		又			25	—	—	—	25	
165	丣△	羽		羽	2	2	21	—	25	仲九 13 (3) 20 (9) 26 (9), 26 (10)
211	兴	兴	兴		4	3	16	—	23	又幺朱 8 (11) 11 (25) 14 (17), 19 (27)

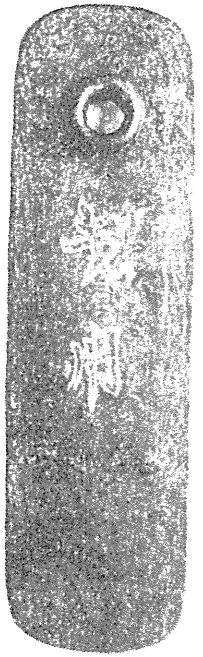
101		𠂤	𠂤		—	23	—	—	23	公𠂤 9 (10) 化𠂤 21 (26)
316	𠂤	𠂤	𠂤		—	6	16	—	22	
315		𠂤	𠂤	𠂤	—	21	—	—	21	百𠂤 10 (24) 13 (13)
208		𠂤			20	1	—	—	21	16 (6), 19 (10)
325		𠂤			1	9	7	3	20	百𠂤 11 (15) 19 (24)
210		𠂤			—	—	20	—	20	又土 13 (16) 𠂤 26 (15)
241		𠂤	𠂤		—	20	—	—	20	28 (19)
14			𠂤		—	—	19	—	19	𠂤𠂤 25 (3) 𠂤𠂤 29 (15)
221	𠂤	𠂤			15	—	4	—	19	
14	𠂤 △	𠂤			—	17	—	—	17	𠂤𠂤 25 (17) 𠂤又 30 (6)
100		𠂤	𠂤		16	—	—	—	16	𠂤𠂤 29 (3) 𠂤 29 (4)
35	𠂤 △	𠂤			15	1	—	—	16	
128	𠂤 △	𠂤	𠂤		1	12	2	—	15	百𠂤 30 (7) 𠂤 30 (8)
289		𠂤			12	—	—	3	15	𠂤𠂤 1 (3) 5 (3)
305		𠂤			2	8	4	—	14	10 (4), 22 (1)
190		𠂤			—	13	—	—	13	
113		𠂤	𠂤		1	11	1	—	13	百𠂤 4 (2) 9 (2)
56			𠂤		—	—	13	—	13	10 (1), 13 (9)
59		土	土		2	8	2	—	12	17 (9) 8 (4) 𠂤又 𠂤𠂤
199	𠂤 △	𠂤			5	7	—	—	12	𠂤又 𠂤百 18 (12) 14 (22)
286		丙	丙		2	8	1	1	12	𠂤𠂤 𠂤𠂤
253		𠂤			—	4	6	1	11	
296		由	由		6	1	2	1	10	

147		𠂤			6	2	2	—	10
48	𠂤	𠂤			—	—	10	—	10
150		𠂤			—	7	3	—	10
176		𠂤 △	𠂤		—	9	1	—	10
141		𠂤			5	1	4	—	10
					330	405	382	13	1,130

17 (11) 24 (5)
𠂤又 𠂤𠂤 𠂤火 𠂤𠂤
𠂤𠂤 𠂤化 伏
伏
18 (6)
几𠂤
𠂤𠂤
伏
20 (7) 10 (22)
几𠂤 几𠂤
𠂤夯 𠂤𠂤 𠂤水
𠂤𠂤 𠂤𠂤 𠂤𠂤



明抄『説郛』所収『燕北録』



成吉思皇帝聖旨牌裏面

初出一覧

第1章 「上代日本語とアルタイ語族」『蒙古』第10巻2号，昭和18年2月
第2章 「上古中國語における語頭重子音について」『中國語學』第17号，昭和23年7月
第3章 「中國語史的比較言語學方法論序説」『外事論叢』第2巻2・3号，昭和23年7月
第4章 「上古中國語音韻體系瑣説」『中國語学研究會関西月報』昭和25年3月
第5章 「滿州語と女眞語」『神戸言語學會報』第1号，昭和24年7月
第6章 「原始日本語研究導論 —— アルタイ比較言語学の前提として」『神戸外国語大学開学記念論文集』昭和24年9月
第7章 「タイ諸語音韻體系に對する一考察 —— 中國語史的比較言語學の一環として」『神戸外大論叢』第1巻2・3号，昭和24年12月
第8章 「契丹文字解讀の可能性 —— 村山七郎氏論文を読みて」『神戸外大論叢』第2巻4号，昭和26年12月
第9章 「十二世紀に於ける蒙古語諸部族の言語 —— Mongolo-Turcica II」『東方學』第5号，昭和27年12月
第10章 「蘇州語音韻體系の諸特徴に就いて」『中國語學研究会論集』第一号，昭和28年9月
第11章 「奴兒干永寧寺碑蒙古女眞文釋稿」『石浜純太郎先生古稀記念論叢』昭和33年11月
第12章 「中国諸民族の言語 —— その史的言語地理学的考察」『神戸外大論叢』第10巻2号，昭和34年2月
第13章 「日鮮共通基語音韻体系比定のための二三の仮説」『言語研究』第37号，昭和35年3月
第14章 「『魏志』倭人伝訳音の音価について —— 上古中国語音韻体系との関連において」『神戸外大論叢』第13巻3号，昭和37年9月
第15章 「東雅臆度抄（其一）—— 蛇と亀」『水門 —— 言葉と歴史』第2号，昭和38年9月，「東雅臆度抄（其二）—— 鳥類譜Ⅰ」『水門 —— 言葉と歴史』第3号，昭和39年2月，「東雅臆度抄（其二）—— 鳥類譜Ⅱ」『水門 —— 言葉と歴史』第4号，昭和39年6月
第16章 「朝鮮語一音節名詞の史的比較言語学的考察」『朝鮮学報』第39・40合併号，昭和41年4月
第17章 「女真文字と現存史料」『歴史教育』第18巻7号，昭和45年9月
第18章 「大宝二年籍帳の仮名体系について（上）—— 美濃筑紫両古方言音韻体系の史料として」『神戸外大論叢』第23巻3号，昭和47年8月，「大宝二年籍帳の仮名体系について（下）」『神戸外大論叢』第24巻3号，昭和48年8月

第19章 「日本語北方起源説 —— アルタイ学の立場から」『言語』第3巻1号，昭和49年1月
第20章 「邪馬台国の言語」『伝統と現代』第26号，昭和49年3月
第21章 「倭人の言語とその展開 —— 日朝両語同系論の立場から」『謎の四世紀』毎日新聞社，昭和49年4月
第22章 「日朝比較言語学とトゥングース諸語 —— 印欧比較言語学をその鍵として」『日本古代語と朝鮮語』毎日新聞社，昭和50年8月
第23章 「日本語の形成」『日本的生活の母胎』河出書房新社，昭和50年10月
第24章 「日本語の比較言語学的研究」『日本神話の比較研究』有精堂，昭和52年4月
第25章 「万葉・宣命・訓点語 —— 日朝両語の情意を表わす語について」『江上波夫教授古稀記念論文集』昭和52年4月
第26章 「日朝色彩名義考釈 —— 東雅臆度覚書」『水門 —— 言葉と歴史』第10号，昭和52年8月
第27章 「日向に関連あるか女王卑弥呼」『科学朝日』1978年2号
第28章 「『皇極経世書』声音図の音価と『韻略易通』の音韻体系について ——『雞林類事』の朝鮮語を表わす漢字音の体系と関連して」『神戸外大論叢』第30巻3号，昭和54年8月
第29章 「契丹語解読方法論序説」『内陸アジア言語の研究Ⅰ』神戸市外国語大学，昭和59年3月
第30章 「上代日本語の源流を探る —— 記紀・万葉を手がかりとして」『別冊歴史読本 謎の歴史書『古事記』『日本書記』』昭和61年2月
第31章 「日朝比較言語学への誘い」『角川・朝鮮語大辞典』角川書店，昭和61年2月
第32章 「日・韓両語比較研究上の問題点」『東国大学校日本学研究所・日本学』第7輯，昭和63年4月
第33章 「契丹漢字音探源 —— 契丹小字によって表記された漢字音の音価とその体系について」1991年5月15日，於羽田記念館日中合同契丹文字国際シンポジウム発表原稿
第34章 「契丹文字、女真文字および西夏文字の関連性についての一考察 —— 成吉思皇帝聖旨牌裏面の番字を足掛かりとして」1993年8月13日，於赤峰市中国北方古代文化国際学術研討会発表原稿
第35章 「匈奴の称号単于について —— 上古漢語音韻とその訳音表記」『水門 —— 言葉と歴史』第17号，平成4年2月
第36章 「日鮮両語比較論に関する往復書簡」『水門 —— 言葉と歴史』第1号，昭和38年7月
第37a章 須藤淳「鳥（トリ）の語源 —— 形態か意味か」『水門 —— 言葉と歴史』第10号，昭和52年4月
第37b章 「須藤淳氏の質疑に答える手紙 —— 日朝比較言語学の方法論をめぐって」『水門 —— 言葉と歴史』第11号，昭和53年8月

著者略歴

長田夏樹（おさだ・なつき）

1920年　神奈川県鎌倉市に生まれる。
1942年　東京外国語学校蒙古語部卒業。
1951年　神戸市外国語大学中国学科教授。
1986年　神戸市外国語大学定年退職。
著　書　『蘇州語發音字典』〔編〕（神戸市外國語大学中國学研究室，1953年），『The Zirni Manuscript – A Persian-Mongolian Glossary and Grammar』〔共著〕（京都大学，1961年），『原始日本語研究 ── 日本語系統論への試み ──』（神戸学術出版，1972年），『邪馬台国の言語』（学生社，1979年），他。

長田夏樹論述集（下）

漢字文化圏と比較言語学

――中国諸民族の言語・契丹女真碑文釈・
民俗言語学試論・邪馬台国の言語――

2001年1月25日　初版第1刷発行　（定価はケースに表示してあります）

著　者　長田夏樹
発行者　中西健夫

発行所　株式会社　ナカニシヤ出版
〒606-8316　京都市左京区吉田二本松町2
TEL（075）751-1211
FAX（075）751-2665

© Natsuki OSADA 2001　印刷・中西印刷／製本・藤沢製本
＊落丁本・乱丁本はお取り替え致します。
Printed in Japan
ISBN4-88848-604-2 C3087